

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02630

研究課題名(和文)「言い換え」に関する語彙・表現の基礎的研究

研究課題名(英文) Basic study on vocabulary and expression on "paraphrase"

研究代表者

小野 正樹 (ONO, Masaki)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：10302340

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本語の言い換え方法と、日本語母語話者および日本語学習者を対象に、どのような言い換え方法を行うか、また、どのような言い換えられた表現がわかりやすいかの実験調査を行った。調査の結果、ストラテジーと、語彙の内包的および外延的知識を使用しての言い換えが見られた。日本語の言い換え方法として、N1はN1だのようなトートロジー表現にも注目した。一見、語彙的に見れば言い換えが失敗したように見えるが、この表現が論理循環ではなく、N1を再定義する主張であることも、他言語との対象から追究した。

研究成果の概要(英文)：I conducted an experimental investigation on the paraphrasing method of Japanese and what kind of paraphrasing way to use for Japanese native speaker and Japanese learner, and what kind of paraphrased expression is easy to understand. As a result of the investigation, paraphrasing with a strategy and inclusive and extensive knowledge of the vocabulary was seen. As a paraphrase way of Japanese, N1 also focused on tautology expressions like N1. At first glance, it seems that paraphrasing failed in terms of lexical terms, but we also pursued from the subjects with other languages that this expression is not a logical cycle but an argument to redefine N1.

研究分野：日本語教育学

キーワード：ストラテジー 内包的意味 外延的意味 情報弱者

1. 研究開始当初の背景

「言い換え」という言語行動は、日常での待遇性を含めた位相による言い換え、話し言葉から書き言葉への言い換え、学術用語への言い換えなど、頻繁に、かつ多用に行われている。2000年には『言語』29(10)(通号349号)でも、「特集 ことばの言い換え」として特集が生まれ、隠語、女性語、婉曲表現、外来語、差別語について扱っている。語彙以外にも、アカデミック日本語での要約研究(佐久間まゆみ 1989 等)、文章論における「換言を表す接続語について 『すなわち』『つまり』『要するに』を中心に」(石黒圭 2001)等の言語研究が見られる。昨今特に外国人介護師・看護師の受け入れや、震災待避マニュアルでも重要な課題項目として位置づけられ、日本語教育学会では「看護と介護の日本語教育」ワーキンググループ、弘前大学人文学部社会言語学研究室(2009)の減災のための「やさしい日本語」の提案、庵功雄(2013)「やさしい日本語」は何を目指すか: 多文化共生社会を実現するために」といった著書も出版されている。また、国立国語研究所では2002年以来、「「外来語」言い換え提案 分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫」として世に問うて以来、やさしい日本語ニュースのように社会的要請としての研究もあり、本研究の意義づけは高まっている。会話分析研究でも理論的に扱われている。Tarone(1981)では「コミュニケーション時に起こった問題を乗り越えるコミュニケーションストラテジー」として位置づけ、言い換えを、借用、援助の要請、身振りの使用、回避と並べて位置づけられている。また、言語教育の読解や作文においても、語彙力・説明力が求められる表現の多様性言い換えの役割が高まり、『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ演習』鎌田美千子・仁科浩美(2014)、オンライン辞書「チュウ太のやしくなれ」<http://yasashii.overworks.jp>(川村よし子 2014)といった教材・教具も出ており、日本語教育での有効性は高い。本研究に関わる内容は、Grice(1975)の「様態の原則: 明瞭な言い方をすること。」(maxim of manner)にもつながるコミュニケーション能力だが、CEFR/JFSTANDRDS の記述においては(B1,2)で「Can use circumlocution and paraphrase to cover gaps in vocabulary and structure.」とされ、外国語力としても高度な技能とされている。このように、言い換えに関する研究や、社会的要請は非常に高いものである。

2. 研究の目的

「言い換え」について、現代日本語でどのような言い換え方法があるかを、コーパスで調査する。その言い換え方法が、日本語の独自性があるかも検証する。次に、データ収集と分析、その分析に基づいた実験調査を行う。

まず、どのような状況で言い換える言語行動が必要かを議論する。その議論に基づき、日本語母語話者と日本語学習者に言い換え作業を依頼する。次に、言い換えられた日本語を、改めて日本語母語話者と中上級レベルの日本語学習者を対象に、「言い換え」られた文の理解のしやすさを依頼する。最終的に研究報告書とデータ集として成果公開することを目標とする。小野他(2014)で、「言い換え」の方法については15種類の方略があることを提案したが、その調査の精緻化を図ることと、言い換えの仕組みや構造、そして日本語学習者にとっての「やさしい日本語」への貢献を図る研究である。

3. 研究の方法

本研究は、大きく分けて二つの方向性を持っている。一つは既存のコーパスを利用し、言い換え方法と表現を見るもので、「N1はN2」という定義文に注目した。もう一点は日本語使用者の観点で、語彙的に、ストラテジー的に分類した上で、わかりやすさや使用しやすさの点から実験調査を行う。日本人からしてみれば、非母語話者とのスムーズなコミュニケーションを、日本語学習者からすれば、効率的な日本語学習を進めるための基礎的データを作成する。

4. 研究成果

本研究では、日本語の言い換え方法と、日本語母語話者および日本語学習者を対象に、どのような言い換え方法を行うか、また、どのような言い換えられた表現がわかりやすいかの実験調査を行った。調査の結果、ストラテジーと、語彙の内包的および外延的知識を使用しての言い換えが見られた。日本語の言い換え方法として、N1はN1だのようなトートロジー表現にも注目した。一見、語彙的に見れば言い換えが失敗したように見えるが、この表現が論理循環ではなく、N1を再定義する主張であることも、他言語との対象から追究した。

このように本研究では、2方向の研究成果を得た。「N1はN2」という定義文の中でも、従来トートロジー表現とされたものが、実は論理矛盾ではなく、再定義という考え方である。中国語、ロシア語との対照も行ったが、日本語の特徴ある表現方法である。次に、日本語の言い換え表現を日本語母語話者と日本語学習者により、言い換える方法がどのように異なるかの実験調査を繰り返した。一つ目の調査はスロベニア、ドイツ、フランス、日本の大学生を対象として、紙面による読解力としての表現の「言い換え」調査である。その結果、「言い換え」には語彙的な知識に関わるもの9種類と、ストラテジーを含めた述べ方に関わるものを6種類に分類した。また、その分類に基づく調査データの分析結果から、言い換えられる語彙の難易度によって、その言い換え方法に傾向が見られることが

分かったことから、言い換えられる語彙の内包的意味の難易度により、言い換え方法が異なることが暗示された。難易度が低い語彙は複雑な形式(多くの場合、外延的に状況に応じた説明)で、難易度が高い語彙は簡単な形式(同義表現や類語表現)を用いての言い換えが多く見られた。さらに、この難易度別にリスト化した語彙を、日本語学習者がどのように言い換えるかの口頭調査を行い、日本語学習者の言い換え方法を、語彙のなじみややささ、フォーマル度、漢語・外来語などの性質や、言い換えられた構文の点から分析した。二つ目の調査とは、カタカナ語やカタカナ語を含んだ表現に注目し、日本語母語話者と日本語学習者への言い換え表現についての分析である、日本語母語話者間、日本語学習者間、日本語母語話者と日本語学習者間の3種類の評価結果の比較を行った。日本語学習者の視点では、日本語母語話者と日本語学習者への評価基準に異なりがあることが窺えた、日本語学習者では比喩表現など内法的意味が判断基準にマイナスの影響を与えること、一方で、日本語学習者には例示などを用いて言い換える技法が見られた。また、日本語母語話者には、言い換えよりも説明に終始する特徴が伺えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計12件)

小野正樹、日本語教育における研究及び実践、東南アジアにおける日本語教育の研究と実践、査読無、2018、pp11-15

牧原功、日本語の繰り返し表現と意味の派生、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第7号、2018、pp.33-42、

小野正樹、日本語のヴァリエーションから言語の多様性を学ぶ上級クラスの実践報告、日本語教育方法研究会、24巻2号、査読無、2017、pp.66-67

小野正樹、多言語記述を目指した同一語句繰り返しの機能について、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第5号、2017、pp.1-12、

小野正樹、日本語らしさとわかりやすい日本語、中央アジア諸国日本研究カンファレンス論文集、査読無、カザフ国立大学、2017、pp.10-26

山岡政紀、日本語配慮表現データベース構築、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第5号、2017、pp.19-30、

牧原功、外国人日本語学習者の用いる積極

的ポライトネス メールの記事を例にして、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第5号、2016、pp.115-124

牧原功、事態の把握と表出 - 自他動詞の選択との関わりから -、言語の主観性 - 認知とポライトネスの接点くろしお出版、査読無、2016、pp.151-171

小野正樹、言い換え表現と配慮表現から見たトートロジー表現について、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第5号、2016、pp.19-30

小野正樹、慣習化された日本語配慮表現の発想、日本語用論学会大会研究発表論文集、査読有、第10号、2015、pp.311-314

[学会発表](計5件)

小野正樹、フレキシビリティから考える日本語らしさ、国際シンポジウム「文化の対話と翻訳・翻案、2018

小野正樹、事態の捉え方と伝え方から見る日本語らしさ、韓国日本研究団体第6回国際学術大会、ソウル市立大学、2017

小野正樹、守時なぎさ、山下悠貴乃、日本語母語話者と日本語学習者にとってわかりやすいカタカナ語の言い換え表現とその評価、2017年度日本語教育学会秋季大会、2017

小野正樹、日本語のヴァリエーションから言語の多様性を学ぶ 上級クラスの実践報告 日本語教育方法研究会、2017

小野正樹・牧原功・李奇楠・山岡政紀、現代日本語の繰り返し表現 表現形式と对人的機能の観点から、Tenth International Conference on Practical Linguistics of Japanese、National Institute for Japanese Language and Linguistics (国際学会)、2017

[図書](計2件)

言語の主観性 認知とポライトネスの接点、小野正樹・李奇楠(編)、小野正樹・牧原功・山岡政紀他、くろしお出版、213頁、2016

習ったはずなのに使えない文法、牧原功他、くろしお出版、242頁、2017

6. 研究組織

(1)研究代表者

小野 正樹 (ONO, Masaki)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：10302340

(2)研究分担者

山岡 政紀 (YAMAOKA, Masaki)

創価大学・文学部・教授

研究者番号： 80220234

牧原 功 (MAKIHARA, Tsutomu)

群馬大学・国際センター 准教授

研究者番号： 20332562